

# 『地獄への広告旅行』

—カール・クラウスと観光—

藪 前 由 紀

## I

1908年10月付でカール・クラウス (Karl Kraus 1874-1936) は、個人誌『ファッケル』(Die Fackel)<sup>1</sup>に『黙示録、読者宛の公開状』(Apokalypse. Offener Brief an das Publikum. 1908)<sup>2</sup>と題するエッセイを掲載した。「おそらくこの『ファッケル』は来る1909年4月1日に刊行されることになる。しかし私は世界の没落は実際、飛行船旅行のオープニングの日から始まったものとみてその日付を記しておく」(Ibid., S. 9.)という断わり書きから始まるこのエッセイは、ちょうどその頃、幾度かの悪天候によって起きたツェッペリンの硬式飛行船の運航失敗<sup>3</sup>を機に記されたものである。このエッセイはさらに次のように続く。

仮に二つの事件(筆者注:『ファッケル』の刊行と世界の没落)がさまざまな外的理由のために遅れて起きることになろうと、私が今すでにそれらを正しく予見していることに何も変わりはないだろうし、次の事を認識していることにも変わりはないだろう。つまり二つの事件はどちらも同じ現象的な悪に、すなわち人類の愚かさの熱狂的進歩に原因があることである。……ありとあらゆる所に世界の脳の腐敗性膿から発生した気体が行き渡り、文化は息をすることも出来ない。結局のところ、死んだ人類が自分たちの作った数々の作品に並んで横たわっている。それらを作り出すために人類はあまりに多くの精神を犠牲にしまったので、もはやそれらを利用するための精神は残らなかったのである。我々はかつては機械を作り出すほど複雑であったが、今や機械によって操作されるほどに単純である。我々は今や……宇宙交通まで行おうとしている。しかし見よ、自然は、より広い次元を文

明の卑劣な行為の目的のために濫用しようという試み（筆者注：飛行船による宇宙の支配）に抵抗して、この自然という野蛮の開拓者たちに、機械だけではなく嵐もまた存在するということを思い知らせた。（強調：筆者）（Ibid.）

1899年にクラウスは『ファッケル』を創刊した。以後それは一時的な中断を含め1936年のクラウスの死まで続けられた。そのほとんどをクラウス一人が書きまくったようなもので、全部で900号以上にも及ぶ。そんな偉業を続行する中でもクラウスは、とりわけ第一次世界大戦前の『ファッケル』紙に掲載したエッセイやグロッセの中で、「技術」と「進歩」というテーマを繰り返して取り上げた。そこでは近代になって著しく「進歩」した「技術」により、「自然」をいとも簡単に支配することができると考えた人類の思い上がりが風刺の対象とされた。上掲の『黙示録』においても、今や人類は硬式飛行船という発達した「機械」を利用し、広大な宇宙空間までを征服しようと試みたが、嵐という「自然」の猛威にあってはひとたまりもなく屈してしまったその無力さ・愚かさが風刺にさらされている。空に乗り出す硬式飛行船の難破のみならず、同時期に書かれたタイタニック号の沈没に関するエッセイ<sup>4</sup>等も、やはり同じ人類の愚かさを扱ったものと言えよう。大事故だけではない。この頃のクラウスはまた、大なり小なり現実が発生した交通機関のトラブルや不通、とりわけ自動車関連事故を風刺対象に取り上げ<sup>5</sup>、「技術」の「進歩」熱に酔い痴れた近代人の思い上がりに対して警鐘をうち鳴らし続けた。とはいうもののクラウスの場合、交通機関のトラブルは、単に「自然」征服を無闇に試みる近代人の愚鈍を風刺するにとどまるものではない。

おしなべてクラウスの著作にあらわれる交通機関というモチーフには、重要な意味合いがあるということを筆者は別のところで示唆した<sup>6</sup>。例えばクラウスが扱う「鉄道」がある。近代ヨーロッパの「技術」の「進歩」の体現ともいえるべき鉄道の敷設・拡張そして運行は、19世紀当時バルカン・オリエント地方への進出を目論んだヨーロッパ帝国主義政策を背景に、西欧の「進歩」イデオロギーをヨーロッパ内外の諸民族の間に定着させるに決定的な役割を果たしたのであった。（もちろんクラウスに

よると、そこにはウィーンの新聞『ノイエ・フライエ・プレッセ』(*Neue Freie Presse*)を始めとするジャーナリズムの大仰な宣伝効果があったわけであるが。)7

太古からの「自然」を縦横に支配しようと、「機械を作り出すほど複雑であった」近代人は、そうこうするうちに「機械によって操作されるほどに単純」なものに成り下がってしまった。つまり次々と最新型の「機械」(交通機関)を産み出した近代人は、まさにそれによって自分たちの思想なり文化なりを操作される結果となってしまったのである。そのような現象はまた、飛行船や軍用機(これらはツェッペリンの功績による)、戦車など大型新兵器が相次いで登場し、まさに「技術合戦」とも呼ばれた第一次世界大戦に直結しただけではなく、——クラウスによると——後に第三帝国の文化政策や自民族中心主義のイデオロギーを嬉々として受け入れる社会的基盤を準備したのである。小論ではこれに関して、クラウスにおける「観光」旅行という切り口で取り扱う。論考の中心になるのは小論のIVから観察することになるクラウスの書評『地獄への広告旅行』(*Reklamefahrten zur Hölle* 1921) (F, Nr. 577-582, 1921, S. 96ff.)である。しかしここで本題に入るにはまだ尚早であろう。まずは時代を追いながら考察を進めたい。

## II

ところでクラウスとて、実生活では近代交通機関のよき利用者であったに違いない。というのも、クラウス生涯の創作活動の骨格となったのは、『ファッケル』の執筆や発行、すなわち活字による営みの外、朗読会や講演会という大勢の Publikum を前にしたなまの演出があった。そのほとんどがクラウス一人の独演会形式で行われた。1910年1月13日にドイツのベルリンで最初の朗読会を開いて以来、クラウスは生涯で合わせて700回以上も演壇に上った。この夥しい数の朗読会をこなすためには、独演者クラウス自身が迅速に開催地に移動することが要求されたであろうし、その移動手段としては、やはり快速な近代交通機関が利用されたと思われる。実際伝記的事実によると、汽車移動の際クラウスは車内で面識のない人から突然話し掛けられるのを好まなかったため、朗読会を

始めてからは、出来るかぎり自動車や飛行機を利用して旅回りしたという。あるいは私生活においても最愛の女性であったシドニー (Sidonie Nadherny von Borutin) 同伴で、若きクラウスがローマ方面へドライブ旅行した事実も残されている。後で触れるように、クラウスはなるほど「観光」旅行には手厳しく批判を加えたけれども、クラウス自身も旅を好んだし、春先や美しい夏のひとときをイタリアやスイスへ旅して過ごしたこともあった<sup>8</sup>。

ここで、クラウスの伝記的事実を引き合いに出し、精神活動面では「技術」の「進歩」に対して徹底した敵対者であったはずのクラウスが、いざ実生活に立ち戻ったならば、人一倍「技術」の「進歩」の恩恵に与っていたとういような、クラウスの矛盾や観念性をあげつらうつもりはない。我々が決して早合点すべきでないのは、クラウスは「技術」の「進歩」と人間性の「進歩」との歩調が合っている場合は、心安らかであった。クラウスが辛辣に攻撃したのは、人間のさまざまな価値をなごりにし、利益をもたらすがゆえに、「技術」を何より最優先とする「進歩」思想であり (Vgl. *ibid.*, S. 59.)、人間が精神的・人道的に発達するテンポと「技術」が「進歩」するスピードとのずれ、「非同時進行性」<sup>9</sup>であった。その現象が顕在化し始めたのが第一次世界大戦勃発前であり、当時のクラウスは、たとえば前述のツェッペリンの飛行船実験に関しても、何回かの飛行成功の快挙は度外視し、飛行失敗だけをいわばベシミスティックに批判したように、「技術」の「進歩」に対して救い難く悲観的であった。(しかし後にツェッペリンの業績が軍用機製造に大貢献したことを考慮するなら、当時のクラウスの「世界の没落」の予見が的中していたことを後世の我々は悟るのであるが。) 1909年に書かれたエッセイ『進歩』 (*Der Fortschritt*)<sup>10</sup>には次のようにある。

……あたかも何か目的が世界を急き立てるのではなく、急ぐことが世界の目的であるかのようであった。両足は前へ前へと進んでいった、けれども頭は後ろに残ったままで心は疲れ果てていた。しかしこうして進歩は進歩に到達してしまい、ついに地球上では手持ちぶさたになってしまったので、進歩はまた新たな次元を付け添えた。進歩は飛行

船を作り始めたのである。……

(ChM S. 202.)

あるいは同時期に「進歩は人間の皮から財布を作る」(『北極点の発見』(*Die Entdeckung des Nordpols* 1909) (ChM S. 272.) と記したクラウスが、このような「非同時進行性」の悪しき現象として捉えた一つが「観光」(*Fremdenverkehr*)である。たとえば第一次バルカン戦争に関する軍事報告を扱った『これが戦争だ、戦争だ、悪魔だ』(*Das ist der Krieg - c'est la guerre - das ist der Moloch!*) (F, 360-362, 1912, S. 39ff.) では、戦時の最中に『ノイエ』紙の派遣記者たちが「技術」の「進歩」を具現する鉄道機関を利用し、観光旅行しながらファーストクラスの車両に身を委ね、戦地バルカン地方の惨事をよく売れる「特ダネ」(*Sehenswürdigkeit*)として取材旅行する非道性 (*Nichtswürdigkeit*) が風刺されている<sup>11</sup>。先にも触れたとおり、クラウス自身もよく旅をした。そのクラウスが絶えず糾弾したは、このような人間の過剰な好奇心を満足させるための「観光」である。その「観光」を少し現象的に敷衍しておきたい。

19世紀の「技術」の「進歩」に伴い、近代に入って「観光」業も前世紀に比べて急速に発達した。それには大まかに捉えて二つの要因がある。その一つは、言うまでもなく交通手段が著しく発達したことで、人間の場所移動が従来に比べて非常に軽便化されたことであり、他の一つに挙げられるのは、高度化した「機械」の使用によって、人間の知覚範囲や今で言うコミュニケーション網が目に見えて拡大したことである。前者はしかしまだ人間の移動を受動的・機械的なものにした一方、後者は人間の好奇心や見聞への欲求を過度なまでに刺激しつつ、それを満たすためのモノを商品化・規格化する結果を招き寄せたものである<sup>12</sup>。そのモノとは——クラウスに従えば「見る価値ある物」*Sehenswürdigkeit*、つまり戦地でのスクープ記事やプライバシーを面白おかしく書き立てた記事、旅行関連で挙げるなら文字どおり名所旧跡 (*Sehenswürdigkeiten*) やわざと異国風に潤色された作られた文化などが列挙されよう<sup>13</sup>。クラウスは、人間がより快適になった近代交通機関に乗りこみ、商品化された *Sehenswürdigkeit* から次の *Sehenswürdigkeit* へと受動的に運ばれ

る「観光」旅行の「需要と供給」の仕組みに、近代「技術」の発達と人間の精神的成長との「非同時進行性」を認めたのである。

### III

1914年6月28日、セルビアの一民族主義者により、オーストリア皇太子が暗殺され、それを機にオーストリア＝ハンガリー帝国がセルビアに宣戦布告、続いてドイツ、フランス、イギリスなどの同盟国・連合国も宣戦布告、やがて第一次世界大戦が勃発した。皇太子フランツ・フェルディナントが暗殺された際、オーストリア国内では「戦争近しの声」が高揚する中で、ウィーンのプレッセが皇太子暗殺に関して、「常套句をふんだんに使用して」(phrasenreich)まことしやかに怒りを表明するその裏で、つまり公的にはもっともらしく道徳を説いてみせるその裏で、その実不人気であった皇太子の暗殺を心密かに喜ぶ声を聞き取った唯一の人間が、クラウスであった。(Vgl. Schick 1965, S. 75.)

クラウスの著作について論じる場合、「進歩」批判と並んでこの「常套句」(Phrase)に対する仮借のない攻撃、特にジャーナリズム界の用いた「常套句」への攻撃に触れずに通ることはできない。しかしこれについてもすでにヴァルター・ベンヤミン (Walter Benjamin) の優れたクラウス論<sup>14</sup>があるので、それを援用しながら、ここでは Publikum との関連から世論についてごく短く触れておきたい。

そもそも世論とはどのようにあるべきか。いつの時代においても新聞界が好んで取り扱うのが世論であるが、世論とはその時々の Publikum が世界を裁断して初めて世論として成立するはずである。しかしながら19世紀には新聞界ならびに読者層が拡大し<sup>15</sup>、新聞界は出来るかぎり多くの定期購読者を獲得して売上部数を伸長するため、ジャーナリスト自身が Publikum を引きつける内容記事を書き立てた。そうして逆に新聞界が形成した世論が、ますます拡大しつつあった Publikum を操作するようになったのである。ベンヤミンは次のように述べている。「……もろもろの意見とは私事にすぎないが、公衆が関心を寄せるのは判決のみである。裁く公衆でなくては全然公衆とはいえない。ここにこそまさしく世論の意味があるのに、新聞界の製造する世論は、この公衆から裁く能

力を奪い、責任を免れているもの、画一化されたものの態度をとるように公衆をしむける。……『ファッケル』は世論など気にとめる必要がない。……この『報道紙』（筆者注：『ファッケル』のこと）のニュースはまさしく世論の判決を挑発しているのだから。……」（Benjamin 1977, S. 335.）

クラウスは『ファッケル』紙に、先に述べた人道から外れた軍事報告記事や、クラウスの『道徳と犯罪』に収録されている、ウィーン在住のある女性の離婚訴訟問題をめぐるジャーナリズムの過剰な反応<sup>16</sup>（ある新聞がこの女性のプライバシーにまで立ち入って離婚問題をスクランダラスに書き立てた。ちょうどそこに声望ある大新聞が介入して道徳を説法した。クラウスはもっともらしい説教の裏で、大新聞が悦に入っているのを読み取った）などを取り上げ、Publikumを巧言と巧妙な手法で取り込みながら、上手く手綱を引く新聞界に対してPublikum自身が新聞界に裁きを下すように促す。（これは現代のメディアと大衆操作の問題の先取りといえよう。）

墮落したジャーナリズムによって形成された思想は、この近代には「進歩」した「技術」（印刷機等）により大量印刷され、市場に出回った。それはまた「思想を流通可能なものに仕立てる商標のごとき」（Ibid., S. 337.）画一化された、慣習化した言葉「常套句」を産み出した。クラウスはこの「技術の産物」（Ibid., S. 336.）としての「常套句」に意図的に対決した。ただしクラウス同様「言語危機」を体験した、たとえばゲオルク・トラークル（Georg Trakl）等表現主義者やフーゴー・バル（Hugo Ball）等ダダイストが、「言語の解放」という同じ意図から言語やフレーズや既成文法の破壊に向かったのに対し、クラウスは自分の雑誌『ファッケル』にプレッセや宣伝広告のきまり文句を次々と引用し、その虚偽や装飾を自ら暴露して風刺するという「引用自身に語らしめる」手法を用いたのである。「言葉を解放することは、常套句の解放と同一であり、それはつまり常套句が単なる印刷物から生産の道具へと変貌することであった。」（Ibid., S. 337.）

クラウスはこのジャーナリズムと戦争の結合を予見した。ジャーナリズムが人間の言語を支配し、人間の思想を支配し、「世界の没落」を招き

寄せたことを見抜いた。第一次世界大戦が始まるや、プレッセは今度はこぞって世論を製造し、熱狂的な「陶醉」(Euphorie)でもって Publikum を戦争へと駆り立てた<sup>17</sup>。第一次大戦はプレッセによって現代の「黙示録」に見立てられたが<sup>18</sup>、その夜のあとに朝は来なかった。それをクラウスは小論の冒頭で挙げた1909年の『黙示録』で予見していたのである。

風刺を書く者は、今日の日に没し、明日という日を期待してはならない。というのも明日なんてもはや存在しないのだから。少なくとも精神の作品のための明日はもはや存在しないのだから、今日まだ一つの世界を持っている者、そいつを連れて世界は没落するのだ。

(UdW S. 14.)

#### IV

さて本題の書評『地獄への広告旅行』をこれまで小論で述べたことを手がかりに観察してみたい。

この批評は第一次大戦後1921年11月の『ファッケル』紙上に掲載され、「戦場での自動車周遊旅行！」と題する1枚の新聞広告が添付されている。(この広告にはクラウスが省略や強調などで手を加えたと思われる箇所が目につく。それは『ファッケル』の他の多数の記事の場合と同様、例の「引用自身に語らしめる」手法によるものと考えてよいであろう<sup>19</sup>。)ここで予め書評『広告旅行』の構成について触れておくと、『広告旅行』の内容全体は添付の広告に対するコメントである。1ページ目から2ページ目の第1段落までにはクラウスによる導入部分があり、1ページ目と2ページ目の間に広告が綴じ込まれている。2ページ目の第2段落から3ページにかけてのコメントのテキストは後で述べるようにパターン化された文体で風刺的に書かれている。

最初に添付された広告の大要を追ってみると、この周遊旅行は、9月25日から10月25日の期間中毎日出発し、参加者は快速列車で夕刻スイスのパーゼルを発ち、フランスのメスに到着する。一流ホテルに宿泊する。翌日参加者は快適な自動車に乗り込み、フランスのベルダン地方を中心に、普仏戦争(1870年—1871年)が起きた戦地や、ドイツ・フランス両

国が激戦を繰り広げ、両国共に前代未聞の死者数を数えた第一次大戦中のベルダンの戦い（1916年2月—1916年6月）の舞台となった戦場を周遊しながら見物し、戦争の「恐ろしさ」（Grauenhaftigkeit）を満喫することができる。途中、引率者について要塞や納骨堂や戦没者の墓地を見学し、かつ一流ホテルで食事やお茶のサービスを受ける。参加費用は自動車代と自動車代、高級ホテルでの宿泊代、一流のサービスにワインやコーヒーやチップ代を含めてほんの117スイス＝フランという格安価格。パスポートや煩雑な旅行手続きは不要。参加希望者は、当新聞社に直接申し込み、1枚のアンケート用紙に記入するだけで受付完了、とある。

この広告を見てまず注目したいのは、当周遊旅行が、クラウドによってこれまで常に槍玉にあげられていた『ノイエ』紙の主催ではなく、変わってスイスの『バーゼル・ニュース』（*Basler Nachrichten*）紙の主催であることである。これには何か意味があるのだろうか。

周知のとおり、スイスは国際法上の永世中立国であり、第一次大戦中も国家の独立と領土の保全は保障されていた。武装中立を保持し続けた。つまり、クラウド流の見方をするなら、当時としては今し方終わったばかりの第一次大戦を「生きのびた者たち」（*Überlebende*）（F, 1921, S. 97.）が、この広告旅行の主催者である。国際上の法制度と自らの国土防衛の努力によって、いわば無傷のまま遠目に見ることができた戦争の悲劇舞台を、今や売り物の *Sehenswürdigkeit* にして現地訪問する「観光」旅行を計画しているわけである。ところで、スイスといえばまた古今、アルプスを始め風光明媚な「観光」地や保養地で有名であり（トーマス・マン『魔の山』の舞台ダヴォスが想起されよう）、世界各国から訪れる客の絶えない国であるが、その「観光」国スイスから出て、隣接するドイツ・フランスの旧激戦地を「格安」価格で「観光」旅行しようという、キャッチフレーズの宣伝がなされている。『広告旅行』の導入部分の中でクラウドは怒りをこめた調子で言う。

……諸民族が病みわずらい、その結果無意味に駆り立てられた、血なまぐさい精神錯乱が荒れ狂った世界で最も恐ろしい舞台が、この広告にある *Sehenswürdigkeit* に対して何の意味があるというのだ！（*Ibid.*）

周遊旅行主催者の人道的退廃にクラウスは激昂するのである。またクラウスにとって、第一次大戦のための無意味な大量死よりも、この周遊旅行の参加者である「生きのびた者たち」の振る舞いの方が恥じしらずなのである。このような非道な、大戦とは関わりがないとする無責任な人間が、実は多くの人間の非個人的な死を招いたのである<sup>20</sup>。

視点をかえて言語的・美学的側面に簡単に着目してみよう。クラウスの『広告旅行』のコメントのテキスト部分では、たとえば原文のまま引用すると

*Sie erhalten* am Morgen Ihre Zeitung.

*Sie lesen*, wie *bequem* Ihnen das Überleben gemacht wird.

*Sie haben* vor jenen Märtyrern und jenen Toten entschieden den Vorzug *einer erstklassigen Verpflegung* in der Ville-Martyre und am Ravin de la Mort.

*Sie fahren* im *bequemen Personen-Auto* aufs Schlachtfeld, während jene nur *Viehwagen* dahingelangt sind.

*Sie haben* nach Mittagessen noch Zeit, die Einlieferung der Überreste der nicht agnoszierten Gefallenen mitzunehmen, und nach Absolvierung dieser Programmnummer noch Lust zum Nachtessen.

(強調：筆者) (F, 1921, S. 97f.)

といった具合に、まず *Sie erhalten*, *fahren*, *erfahren*, *haben* などの語、その他 *bequem*, *erstklassig* など、広告の中で機械的に使用される単語（広告中の太字の強調はクラウスによるものと思われる）やその表現方法、あるいは *erstklassige Verpflegung* や *Wein*, *Kaffee*, *Trinkgeld inbegriffen* などの言い回しや「きまり文句」が意図的に反復使用される形で、からくりのようになった言語が風刺されている。

また、最後の2つの例文 *Sie fahren*, ...や *Sie haben nach Mittagessen*...に観察されるような、戦場の出来事と「観光」客に課された旅行プログラムとのコントラストな組合せは、この周遊旅行の冷酷さをグ

ロテスクに際立たせるに効果的である。このような対照表現はクラウスのモンタージュにはよく見られる。クラウスのモンタージュは、極悪非道なものを前にして人間が実際はモラル的・政治的には抵抗することが求められるのであるが、それがあまりにもひどすぎるのでまともな反応を示すことができず、苦々しく笑うことしかないという意味で、風刺的である<sup>21</sup>。…*noch Lust zum Nachtessen* は悲惨な戦場を前にしてまだ食欲がある人間の残忍さへの風刺が色濃く現れている。

そして『広告旅行』の極めて深刻なコメントのテキスト全体が、広告に確認されるようなパターン化された文体で書かれている。それは無数の人間がたおれた戦争という悲惨な歴史を背負う幾つかの戦場を、一度にして機械的に巡回する「観光」旅行（「あなたがたは、第一次大戦の戦場に加えてさらに1870年—1871年の戦場を周遊して帰ることを決めるや、たっぷりとした朝食を、しかもロシアが餓死しているとき、サービスしてもらいます。旅行はいっしょくたに行われます。」）の無機質な性質や非道さを嘲笑的なまでに風刺している。

言語的・美学的面からも、クラウスは広告の「常套」表現を逆手に取りながら、周遊旅行の非人間的性格を風刺しているといえよう。

さて今一度、この自動車周遊旅行の条件ならびに参加希望者に目を向けたい。すなわちバーゼルからフランス旧戦地への往復の旅は「快速列車」による移動（Bahnfahrt II. Klasse）であり、（1等列車ではない）、特に復路は「夜行列車」であり、旅のスケジュールは主催者側が予め組み立て提示してあり、目的地での移動には自動車が用意している、何より格安旅行であり、面倒な手続きが一切不要であるなど、現代の我々のツアー旅行にも比肩するような、旅の早さ（短さ、手軽さ）・安さを満たす条件が出揃っている。これらの条件から考えると、1921年頃のこの宣伝広告旅行は社会的にはかなり一般化したものであった。つまりブルジョワ層だけではなく誰の手にも届く条件の「観光」旅行であったと思われる。（チラシの中の「ファーストクラス」という形容詞は、先に述べたように大した意味はなく、従って参加希望者に「ファーストクラス」のステータスを条件づける意味合いはなく、まずは参加者を旅行へと魅了

するための宣伝用語と考えてよいであろう。)

ここで「観光」の歴史について詳述するわけにはいかないが、参考までに少し振り返ってみたい。「観光」旅行というものは、一般に18世紀イギリスで始まった「グランド・ツアー」(Grand Tour)に端を発すると言われる。それはもっぱら貴族階級の子弟を対象としたグループ高級旅行で、まず第一に、彼らが旅によっていわゆる教養を身につけることが目的であった。彼らの中で共通の価値を守りつつそれを改新し、社会生活を営むに必要な礼儀作法や態度を身につける、あるいはまた外国の異なる価値観や作法を学んで知識や経験を豊にすることが目的であった。その後18世紀末に及んでこの「グランド・ツアー」でも、娯楽や異文化との接触、有名な宮殿や教会や建造物の見物などが旅の大きな構成要素となってきた。しかしこの時代に旅をするには、多額の費用そして何より多くの時間を要したという理由から、対象は貴族階級に限定され、自由に使用できる余暇時間を有しなかった階層の人々はこのような旅から閉め出されていた。しかしフランス革命後、貴族にかわって市民が台頭し、旅をしはじめる。最初市民は、自分たちにはかつて不可能であった「グランド・ツアー」の真似事の旅を好んだ。名所から名所へと馬車を走らせ、出来るかぎり沢山のモノを見物しようとする彼らの姿は、当時よく戯画化されたという。その後産業革命を経て19世紀に入ると、蒸気船や鉄道や自動車の時代を迎え、旅行者の数は急増する。また社会構造の変化に伴いプロレタリアートが登場してくると、旅行者の旅の目的にも変化が生じてきた。過酷な重労働を余儀なくされた日常生活や喧騒な大都会から少しでも逃避するために、人々は小旅行を好んだ。しかも社会層に相応した旅に人気が集まったのである。つまり短期で安く早く旅することが可能なグループ「観光」旅行が望まれた。こうして20世紀の大衆観光旅行 Massentourismus の時代へと突入した<sup>22</sup>。

自動車周遊旅行に立ち戻ろう。批評『広告旅行』が著わされた1921年頃といえば、ヨーロッパでは大戦間期に当たる。ドイツ語圏内に目を向ければ、オーストリアでは第一次大戦で崩壊したオーストリア・ハンガリー帝国を追想する雰囲気、依然として強かった時期であった一方、ドイツでは1918年ヴィマル共和国が誕生し、この共和国が一時的な相

対的安定期（1924年—1929年）に入るまでの、社会革命運動の烈しい時代であった。スイスでもブルジョワ・社会主義両勢力の抗争対立が露骨になった時期であった。そして周知のとおり、この間社会構造にも再び変化が生じる。つまり市民層の中で、ブルジョワにもプロレタリアにも属さない小市民や中間層——特にホワイトカラー層が急増したことである。この新しい層こそが、大戦間期のいわゆる大衆文化の担い手であった。

『広告旅行』に添えられた自動車周遊旅行の広告は、この小市民や中間層をターゲットとした宣伝であると考えられる。限りなく大衆旅行に接近した誰にでも手の届きそうな諸条件、それでいて *erstklassig*, *par excellence*, *hochinteressant* などの言い回しをちりばめた広告文は、当時のプチブルの上昇志向や虚栄や欲望を巧みにくすぐり、『バーゼル・ニュース』新聞は多数の「観光」旅行参加希望者（すなわち新聞予約購読者）を獲得したものとされる。しかも旅行から帰った彼らには新聞社から功名心をそそる「感謝状」が送付されるのである。（Vgl. F, 1921, S. 98.）

あなたがたは、『バーゼル・ニュース』新聞が提供する一流の出し物に比べれば、ライバルの新聞社が……戦場や……納骨堂を（見物用に）自由に使用して提供することができるものでさえ、取るに足りないものであることがおわかりです。『バーゼル・ニュース』新聞は首尾よくベルダンでの損害で、自分たちの予約購読者のリストを満たすことに疑いはないでしょう。（Ibid.）

またクラウスは『広告旅行』の冒頭で次のように記している。

人類の文化の虚偽のすさまじい崩壊後、そして諸民族が自分たちの行為によって、かつては精神的であったものすべてとのつながりは、極めて恥ずべきインチキの一つであること、それはおそらく観光旅行の振興のためにはよくつながっていただろうが、決してこの人類の倫理的水準の向上にはつながっていなかったことを決定的に証明した後で、この人類には有りのままの、自分たちの状態の真実以外に何も残

らなかつた。そして人類はもはや嘘を吐くことが不可能な地点に達した。そしてこの広告の写しほど人類に自分たちの真の姿を認識させるものはない。(強調：筆者) (Ibid., S. 96.)

## V

現代の我々からすると、クラウスがなぜこれほどまで辛辣に「戦場への自動車周遊旅行」を批判したのか、なぜこれほどまで曲解して解釈するのかと疑問を感じるかもしれない。現代人の感覚では、旧戦地訪問も極めて有意義な旅行である。しかしながら「観光」旅行も時代のコンテキストによって意味合いが異なるのである。「飛行船」の飛行に「世界の没落」を予見したクラウスは、「自動車周遊旅行」の宣伝にも未来の災禍を予見していたのである。

繰り返しになるが、この周遊旅行を主催したのはスイスの『バーゼル・ニュース』新聞である。言うまでもなくスイスは第一次・第二次大戦を通じて、政治的亡命者の庇護国の役割を果たした。人道主義者・平和主義者クラウスがスイスのこういった側面を批判したとは考えがたい。クラウスが『広告旅行』で批判したのはやはり「観光」政策面であると言えよう。けれどもその批判もスイスという特定の国家や国民に向けられたものではなく、——クラウスの著作に見られるウィーン批判の矢が、常にウィーンから発して近代ヨーロッパ全体へと刺さるように——『広告旅行』の全 Publikum からヨーロッパ人全体に向けられている。それはこのエッセイの後半部分にあらわれる「諸国家」(Staaten) という複数国家を示す語にも見て取れる。従って「生きのびた者たち」という表現も、第一次大戦を生きのびた全国民を示す表現であると思われる。

「観光」旅行はヨーロッパの1920年代から30年代にかけて、ますますの興隆をみせる。たとえばドイツでは1933年11月、ベルリンで国家社会主義党により「クラフト・ドゥルヒ・フロイデ」(Nationalsozialistische Gemeinschaft Kraft durch Freude) という組織が結成された。これは労働への新たな意欲と英気を養うという(名義上の)目的で、

全国民に「平等に」余暇時間を保障し、その余暇を利用し、「集団で」旅行したり運動したりすることを促進する大がかりな組織であった。もちろんそこにはすでに国家による国民の余暇時間の統制があった。集団旅行とは「リーダーが国民に正しい道を示し、ナチスの規律や世界観を国民に教育して」、国民を思想的に画一化していく教育現場であった。「民族共同体」のイデオロギーのもと国民が結束を固め、自国の文化の優秀性を認識するための現場であった。彼らはやがてヒトラーというリーダーによって総動員され、地獄へと旅発った。(Vgl. Prahl u. Steinecke 1989.)

『広告旅行』に観察されるクラウスの批判は、戦場跡地を売り物にする人類の道徳的退廃だけではない。未来への警告でもある。つまり「観光」旅行というものが、実際は *Sehenswürdigkeit* として提供された、画一化された外国文化を「観光」客が享受する一方で、彼らは決められたプログラムに則って受動的に行動し、グループで場所移動し、共通の「一流の」食事や同一の「一流の」ホテルでのサービスを楽しむことで、彼らの人類の行動や思想や文化そのものが画一化・単一化されることへの警告でもある。そこではかつての旅が有した旅による *Verkehr* という要素は欠落し、場合によっては異国・異文化との接触が、逆に自国民の結束と連帯感を強化することに結びつくのである。

(これは「あなたがたは、朝新聞を受け取ります。あなたがたは、生き残ったことがどんなに快適であるかを新聞で読みます」といったコメントのテキストの最初の文章や、幾つかのコントラストを形成する文で風刺している。)このようにして、自動車周遊旅行は旅行参加者を「機械」で移動させ、「画一的な」スケジュールを与えることで、ますます操作しやすい「単純な」人間を作り出すに貢献するのである。

さらに『広告旅行』の後半部分には次のような箇所がある。

あなたがたは、戦時に平和時にあなたがたはその犠牲者となった諸国家が、……旅行先が戦場へと向かうなら、あなたがたにパスポートの手続きを免除するということを知ります。(強調：筆者)(*Ibid.*, S. 98.)

「国家がパスポート手続きを免除する」という言い回しは、スイスが戦時「諸国家」からの政治的亡命者を「面倒な手続きなしに」受け入れた事実がパロディ的に下地になっていると思われるが、「旅行目的地が戦場であるというなら、パスポートの手続きは不要」という条件は、パスポートという身分証明なしに、つまり諸国民の誰でも彼でも戦場に行けると理解することができる。すなわちこれは旅行者が顔のない大衆 Masse となって戦場へと導かれることへの批判であり警告である。そのあとさらに次のような箇所が続く。

あなたがたは、これらの諸国家が、死から嘲笑を作り、大惨事で一儲し、そして特に秋季旅行の際には地獄へ寄り道することをすすめる海賊たちの生活を、それどころかその海賊たちの名誉をも明確に保護する刑罰法規を有しているのを知ります。(Ibid.)

あるいは次のような文もある。

ここにまず人類を、そして今後は生存者 (Überlebende) を戦場へと導くための新聞の伝導が行われるのかと。(Ibid., S. 97.)

「海賊たち」というのはプレッセのジャーナリストのことを示唆すると考えられる。ここでいう地獄(あるいは戦場)とは、ベルダンという過ぎ去った過去の戦場を意味するだけでなく、こうして思想的・文化的に画一化・均質化された「観光」旅行参加希望者、顔のない大衆が行き着く先の地獄、ヨーロッパに迫り来る新たな地獄、つまり狂信的ナチズムという地獄でもある。クラウドはそれを予見していたものと思われる。従って『地獄への広告旅行』という表題の地獄とは、過去の地獄と将来の地獄との両義であると考えられる。

\*

現代の我々は、クラウドは「観光」旅行をジェフリー・ハーフ (Jeffrey Herf) のいうナチ時代の「反動的モダニズム」<sup>23</sup>の前哨とし捉えていたこ

とに気づかされる。すなわち「技術」面での「進歩」（交通機関）と文化・思想の画一化——これがやがて自民族中心主義へと流入するが——との見事なコンビネーションがクラウスの示した「観光」旅行であった。

筆者は前稿においてもクラウスが批判した「観光」について言及した。それはヨーロッパの帝国主義時代の「観光」に言及したもので、そこではいわゆる「観光」へと操作する側（『ノイエ』紙やそのジャーナリストなど）への批判が厳しかった。しかし時代を経て、大戦間期に書かれたこの『広告旅行』においては、（地獄への）「観光」旅行へとやすやすと操作される大衆への批判の方が一層厳しいところがあると思われる<sup>24</sup>。それはまたクラウスには常に時代に対する先見の明があったことの確かな証でもあろう。

ところで、クラウスの批判は貴族的であるとの誇りは免れない。クラウスの旅行もまた貴族的であった。しかしそれでもなおクラウスの「観光」批判は、現代の我々の旅行のあり方にも少なからず波紋を投げかけてくるのである。

#### 注

- 1 Kraus, Karl : *Die Fackel*, Wien 1899-1936. Nr.1-922. (以下本文中ではFと略記し、『ファッケル』からの引用には号数とページ数と発刊年のみを付記した。)
- 2 Kraus, Karl : *Untergang der Welt durch schwarze Magie*, Frankfurt a.M. 1989. S.9. (以下 UdW と略記)
- 3 ツェッペリン (Ferdinand Graf von Zeppelin 1838-1917) の硬式飛行船の飛行実験について若干説明を加えておくと、1900年に第1号が短距離ながら浮揚に成功、1906年に第2号の飛行は嵐のため難破、第3号は飛行に成功、第4号は再び嵐のため大破した。なるほど飛行船実験は天候との戦いであったわけである。因みにツェッペリンは1908年に飛行船運航会社を設立した。1908年とはこの会社の創業開始日に当たる。
- 4 Vgl. Kraus, Karl: *Großer Sieg der Technik: Silbernes Besteck für zehntausend Menschen oder Furchtbare Versäumnisse: Gott hat nicht Schiffbau studiert*. 1912. In: UdW, S.43-49.

- 5 Vgl. z.B., Kraus, Karl: *Der Löwenkopf oder Die Gefahren der Technik*. 1913. In: UdW, S.178-184.
- 6 拙稿『カール・クラウスと第一次バルカン戦争——『ファッケル』におけるオスマン帝国の衰微——』関西大学『独逸文学』第41号1997年 関西大学独逸文学会99ページ以下参照。なおここで小論の論旨の一部が上掲の拙稿と重なることを断っておく。
- 7 同上書 参照。
- 8 Vgl. Schick, Paul: *Karl Kraus*, Hamburg 1965.クラウスの伝記については本書を参照した。
- 9 Fischer, Jens Malte: *Das technoromantische Abenteuer*. In: Vondung, Klaus (Hrsg.), *Kriegserlebnis*, Göttingen 1984, S.284.
- 10 Kraus, Karl: *Die chinesische Mauer*, Frankfurt a.M. 1987, S.197-203. (以下ChMと略記)
- 11 注6の拙稿 参照。
- 12 Vgl. Schivelbusch, Wolfgang: *Geschichte der Eisenbahnreise*, Frankfurt a. M. 1989 u. Benjamin, Walter: *Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit*. In: W.B.: *Gesammelte Schriften*, Frankfurt a. M. 1974; 2. Aufl. 1978.
- 13 Vgl. z. B., Kraus, Karl: *Von den Sehenswürdigkeiten*, 1908. In: ChM, S.182-186.
- 14 Benjamin, Walter: *Karl Kraus*. In: W.B.: *Gesammelte Schriften*, II-I, Frankfurt a.M. 1977, S.334-367. 本文中の引用の訳出しには高木久雄訳『文学の危機——ヴァルター・ベンヤミン著作集7』（晶文社 1969年）を参照させて頂いた。
- 15 因みにクラウスが天敵とした『ノイエ・フランエ・ブレッセ』は第一次大戦前夜11万2千の発行部数を誇り、その31%を外国の購読者に直接送付していた。当時のヨーロッパの代表紙のうち『ノイエ・チュウリヒャー・ツァイトゥング』は4万5千、『ザ・タイムズ』は5万1千の発行部数であったという。本文も含め、この間の事情は池内紀訳『人類最後の日々』（法制大学出版局）の訳注を参照させて頂いた。
- 16 Vgl. Kraus, Karl: *Sittlichkeit und Kriminalität*. 1902. In: K.K.: *Sittlichkeit und Kriminalität*, Frankfurt a.M. 1987, S.9-28.
- 17 この辺りの現象はクラウスの『人類最後の日々』（*Die Letzten Tage der Menschheit* 1922）の幾つかの場面に見られる。その他第一次大戦の Euphorie

- に関しては Vgl. Vondung, Klaus (Hrsg.), *Kriegserlebnis*, Göttingen 1984.
- 18 Vgl. Vondung, Klaus: *Die Apokalypse in Deutschland*, München 1988, S. 150-257.
- 19 Vgl. Vondung, Klaus: *Von Vernichtungslust und Untergangsangst. Nationalismus, Krieg, Apokalypse*. Aus dem Text für das Funkkolleg „Literarische Moderne“ vom Oktober 1993-Juni 1994.  
ここで一つ断り書きをしておく。実に残念ながら、筆者は「戦場での自動車周遊旅行！」の広告の原本を入手すべく努力したが徒勞に終わった。フォンドゥングは上記のラジオ講座の中で、この新聞広告の発行日を、書評『地獄への広告旅行』が書かれた1921年と見做して論旨を進めている。筆者も小論ではそれに従いたい。なお筆者はこのラジオ講座のテキストを持たず、録音テープのみを所持しているため、引用ページ数の表記を省略する。
- 20 Vgl. *ibid.*
- 21 Vgl. Vondung: *Apokalypse*. S.425ff.
- 22 Vgl. Schivelbusch: a.a.O., Prah, Hans-Werner u. Steinecke, Albrecht: *Der Millionen-Urlaub*, Bielefeld 1989 u. Kramer, Dieter u. Lutz, Ronald (Hrsg.): *Reisen und Alltag*, Frankfurt a.M. 1992.
- 23 ジェフリー・ハーフ『保守革命とモダニズム——ワイマール・第三帝国のテクノロジー・文化・政治』中村幹雄他訳 1991年 岩波書店 参照。
- 24 フォンドゥングはラジオ講座の中で、『地獄への広告旅行』をめぐる、第一次大戦の戦場という「地獄」を見物旅行する人間の「非道さ」に対するクラウスの風刺を中心に鋭く論究している。しかし筆者は『地獄への広告旅行』が著わされた時代背景を重視しつつ、「大衆操作」に対するクラウスの警告をも重視し、「地獄」を第一次大戦だけではなく、迫りつつあるナチス第三帝国の意味との両義的に解釈した。

# *Reklamefahrten zur Hölle*

## —Karl Kraus und der Fremdeverkehr—

Yuki YABUMAE

1908 veröffentlichte Karl Kraus den Essay *Apokalypse* in seiner Zeitschrift *Die Fackel*. Er begann mit einer scharfen Kritik am Unglück der Zeppelin-Schiffahrt infolge eines heftigen Sturms. Für Kraus bedeutete das Ereignis, daß die Natur die Maschine noch besiegen konnte.

So zitierte Kraus in der Vorkriegszeit oft Berichte von Verkehrsunfällen, um die Hybris und Dummheit der modernen Menschen zu kritisieren, die die Natur mit der modernen Technik zu „erobern“ versuchten.

Kraus trat dem Fortschrittsglauben immer entgegen, da sich die Humanität „ungleichzeitig“ zum Fortschritt der modernen Technik entwickelt. Diese „Ungleichzeitigkeit“ sah Kraus auch in der Entwicklung des Fremdenverkehrs. Den Reisenden ermöglichte er z. B., in bequemen Zügen über Schlachtfelder zu fahren und auch einen grauenhaften Gebiet als „Sehenswürdigkeit“ zu besuchen.

Neben dieser Fortschrittskritik muß bei der Kraus-Forschung die Kritik an den Phrasen behandelt werden. Die Phrasen sind nach ihm die Produkte der modernen Technik. In der Neuzeit entwickelt sich eine Presse, die zuletzt die öffentliche Meinung gestaltet. Das wachsende Publikum damals werde deswegen von ihr manipuliert. Dazu konnten die Meinungen der Presse mit dem drucktechnischen Fortschritt immer weitere Kreise erreichen, was zur Uniformierung des

Gedankens und des Wortes der Menschen führt. Kraus kritisierte durch seine Zitats-Technik diese Phrasen der Presse. Kraus war es übrigens, der frühzeitig erkennen konnte, daß die Presse Kriege herbeiführen kann.

Die Besprechung *Reklamefahrten zur Hölle* wurde von Kraus 1921 geschrieben. Ihr ist das Abbild einer Zeitungsanzeige beigelegt, die für Schlachtfelder-Rundfahrten im Auto wirbt. In der Besprechung *Reklamefahrten* kommentiert Kraus satirisch diese Annonce. Hier wird dieser Kommentar anhand der obengennanten Aspekte ausführlich behandelt.

Kraus kritisiert zunächst die Inhumanität und Schamlosigkeit der überlebenden Menschen, die diese Rundfahrten mitmachen; das Ziel der Fahrten sind nämlich deutsch-französische Schlachtfelder, wo ungezählte Menschen sinnlos verbluteten und fielen, nun als „Sehenswürdigkeiten“, inklusive bequeme Autofahrt zum besten Hotel.

Ästhetisch und sprachlich betrachtet, werden die Phrasen der Anzeige gezielt wiederholt, um ihre Uniformität und Ornamentalität satirisch zu entlarven. Der Kontrast im Satz, der zwischen der Grausamkeit der Kriege und der Lustigkeit der Rundfahrten gebildet ist, wirkt so grotesk, daß er selber wieder lächerlich gemacht wird. Der Stil des Kommentars imitiert den musterhaften Stil der Annonce, so daß der ernsthafte Inhalt teilnahmslos dargestellt ist.

Historisch gesehen wurde diese Besprechung 1921 zwischen den Weltkriegen geschrieben. In dieser Zeit bildete sich in Europa der Mittelstand, der weder zur Bourgeoisie noch zum Proletariat gehörte. Die Reisebedingungen der Zeitungsanzeige, z.B. ermäßigter Preis, kurzfristige Gruppenreise, Bahnfahrt II. Klasse, ohne schwierige Reiseformalitäten, scheinen den Mittelstand anzusprechen. Vor allem die Wörter wie „erstklassig“, „par excellence“ erregten wohl hohes Interesse der „petit bourgeoisie“. Mit solcher Werbung gewann der

Zeitungsverlag wohl viele Abonnenten aus dem Mittelstand. So manipulierte die Zeitung die Masse und uniformierte Gedanken und Kultur der Zeit.

Kraus kritisiert scharf dieses Manipulationsmittel und warnt auch die leicht zu manipulierende Masse davor.

In dem Sinne ist für Kraus der Fremdenverkehr ein Zeichen für einen solchen Uniformierungsprozeß. Der Fremdenverkehr mit der manipulierten Masse mündete schließlich in den Nationalsozialismus.

Die Hölle der *Reklamefahrten zur Hölle* bedeutet deswegen nicht nur die vergangenen Kriege, sondern auch das kommende Dritte Reich.